# 令和８年度第１回狭山市協働推進協議会会議録

開催日時　　令和８年９月１８日（金）
　　午後２時から午後４時まで
開催場所　　市役所　６０４会議室
出 席 者　　荒木委員、小川委員、田口（博）委員、中野委員、安永委員、稲葉委員
　　清野委員、影山委員、西村委員
欠 席 者　　齋藤委員、田口（和）委員、柳澤委員
市側参加者　　市民部長
事 務 局　　自治文化課長、同課主幹、同課主査
　　さやま市民大学学長、市民大学担当課長、同主査２名
公開区分　　公開
傍 聴 者　　なし

１　開会

２　協働推進協議会委員委嘱式

３　委員自己紹介

４　議題

（１）協働によるまちづくりについて
市民提案型と行政提案型の協働事業について資料２の【協働】のまちづくりを参照しながら説明を行った。また、令和８年度に実施をしている４事業について紹介を行った。

〈質疑応答・意見〉
委　員
協働によるまちづくり条例を制定したのが、平成３０年度ということでそれなりに年数が経過している。協働そのものについて時代に即した見直しが必要と感じるが、条例の更新や見直しはどのような形で行っているのか。
事務局
条例の更新は行っていないが、協働事業の制度の見直しは現在検討を進めている。

（２）さやま市民大学について
資料３をもとに市民大学の教養学部の令和７年度期運営報告と令和８年度期の運営概要、コミュニティデザイン学部トライアルの進捗報告について説明を行った。

〈質疑応答・意見〉
委　員

まちづくりの担い手を育成することを目的としているが、どのようなレベル感の方を育成することを想定しているのか。また、教養学部の受講生の中にはまちづくりには関心が低く、自分が興味のある教養の講座だけを受講したいという方もいらっしゃるのではないか。

事務局

担い手については明確に定義があるわけではないが、これまで何もやっていなかった方がゴミ拾いを始めるようなことなど、地域でちょっとした活動を始めることを想定している。また、地域のイベントやお祭りに参加する方なども、参加すること自体が活動を応援していることになることから、これらの方も担い手として含まれると考え、まちづくりの担い手を広い概念として捉えている。

また、教養学部のカリキュラムでは、まず基礎・必須講座を受ける中で地域への関わりが大切であることや学ぶこと自体も大事であることを学んでもらい、その後に自由選択講座を受けていただくカリキュラムとしている。そのため、自分の興味がある講座以外も受講する仕組みとなっており、実際に、歴史やパソコンにだけ興味を持って市民大学へ入学した方が、基礎・必須講座を通じて様々なことに興味・関心を広げ、多くの講座を受講してもらっている。こうした取り組みの先に、地域への愛着や関わりを高めていくことに繋がると考えている。

委　員

まちづくりの担い手を目指すということだったが、受講者個人の目線で考えるとこの目的と受講者の思いが必ずしも一致しないと思うのだが見解は。

事務局

まちづくりの担い手というと少しハードルが高いと感じられる方も多いというのは認識している。教養学部の PR を行う際は、募集案内で写真を多く使うなどにより「楽しそう」と思ってもらえるよう努め、できるだけ心理的なハードルを下げるよう工夫している。コミュニティデザイン学部トライアルも同様にプロモーションに力を入れているが、それに加えて修了生が「こんなこともできるようになりました」というモデルとして発信していけるよう現在事業に取り組んでいる

委　員

まちづくりの担い手がその後どのようになっていってもらいたいというビジョンはあるか。

事務局

まちづくりの担い手といってもレベル感が様々ある中で、市民大学として目的としているのは、まずは地域のゴミ拾いなど、小さくても良い活動に取り組んでいただける方を想定している。小さな活動をする担い手が増えていった結果、自分の活動の幅を広げることや、協働事業に取り組む方が増えていくことが、事業の成果と言えるのではないかと考えている。

委　員

市民大学で講座を担当している立場として補足すると、受講したことを機に狭山に「住み

たい、住み続けたい」と思ってもらえたらいいと考えている。ゴミ拾いの例にしても、市民大学の受講を機に自分でまちに関わること、地域につながる方が少しずつ増えていくことでいいサイクルが生まれていくと思う。

委　員

現在受講している６４名も自治会等何かしら地域で既に活動している可能性が高い。市民大学の受講生を増やしていかないと地域に関わる担い手の総数は増えていかないのではないか。

委　員

地域に関わる活動を全くやっていなかった方が、簡単なことでも何か初めてもらうきっかけ作りが基礎・必須講座の役目である。そこから市のことに興味を持ってもらって、地域のコミュニティへと輪が広がっていくことも期待できると思う。

事務局

受講生を増やすという目的だけを考えるのであれば、受講料無料や２年間の受講期間を短縮するなどハードルを下げることもできるが、それでは学んだことが身につかないと考えている。有料で２年間という条件を設定することで、ハードルを越えた方は確実に知識等が身に付いており、まちづくりへの興味・関心も高まっている。今の段階では受講生の数を増やすことより、市民大学での学びを通じて受講生一人ひとりの変化・成長を生み出していくことが大事だと考えている。

委　員

パソコンや AI について学びを深められる講座を増やしていってもらいたいと考えている。また、市民大学として育成したい担い手の分野などは決めているのか。

事務局

AI については、生成 AI で料理のレシピを作成し、実際に調理実習を行う講座を実施し、大変ご好評をいただいた。生成 AI を使ったことがなかった方が、生成 AI を身近に感じる機会となり、日常生活の中でまずは使ってみる・やってみるきっかけづくりになったと考えている。担い手育成の方向性については、市が分野を定めるのではなく、受講生自身が興味・関心を持っていることを活動につなげられるよう支援するという考えで運営している。

委　員

コミュニティデザイン学部トライアルの案内を見たことがなかった。市の広報等をあまり見ない方にはどのような PR を行っているのか。

事務局

初年度、成果物がない状態での PR は難しい部分がある。教養学部の募集案内等は広報紙等で掲載しているものの、受講した方が「どうなったか」をまだ書くことができない。しかし、今年度の受講生の中にはポジティブな口コミを聞いて受講を決めた方もいる。コミュニティデザイン学部についても今受講している方を丁寧に支援することで、その結果「こんな効果がありました」という部分をしっかり伝えていきたい。

委　員

令和８年度期の受講生３２名の年齢構成や通学手段、居住地の詳細は。

事務局

年齢は７０代が中心。若干ではあるが４０～５０代の方もいらっしゃる。令和７年度期との違いは市外の受講生が２名いること。通学手段は車・徒歩・バスでほぼ同程度の割合。

委　員

市民大学のキャンパスである狭山元気プラザへ行くことが難しいという高齢者の方も多い。また、地域で活動することは労力も必要なので、やはり５０代くらいの受講生が増える方法を考えていってもらいたい。

事務局

基礎・必須講座については市民大学にお越しいただく必要があるが、公民館等の講座を受講したことを単位として認める制度も設けているため、自分のライフスタイルに合った形で受講できるようにしている。地域の活動への関わりに関しては、まず無理なく地域に関われること、例えば家族とマーケットや自治会のお祭りに行ってみるなどでも良いと考えている。

委　員

狭山のまちも日々変化する中で、昔の市民大学では狭山のことを知らずに自分の興味があることだけ受講している方も多かった。狭山のまちのことを知るきっかけづくりをするという基礎・必須講座の建付けは素晴らしいと思う。

事務局

興味があることだけ学びたい人にとっても、基礎・必須講座を通じて様々な内容に触れていただくカリキュラムにしており、さらに受講生同士交流しながら学ぶことで継続して学ぶことにもつながると考えている。

委　員

意見として申し上げると、令和７年度期の教養学部１期生の卒業式は大切に行ってもらいたい。１期生がこれから地域の中で果たす役割や今後の受講生に与える影響は非常に大きいと思う。

事務局

受講生同士のつながりができたという部分も当然、市民大学の成果となるので、卒業生同士の思いを大切にできるような機会についても検討していきたいと考えている。

５　その他伝達事項

事務局

提案型協働事業について一部見直しを検討している。方向性が定まった段階で、改めて協働推進協議会の場でお諮りしたいと考えている。

また、配布した資料４で市内の NPO 法人について７年度の実績と８年度の事業実施予定を記載している。今後の活動等の参考にしてもらえればと考えている。

６　閉会